

学園ニュース

富山大学

NO.71

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

平成3年2月14日



学内風景（その34）

工学部校舎

教育学部3年・中嶋宏文

↑↑↑↑↑↑↑ 目

次 ↑↑↑↑↑↑↑

卒業生へのはなむけの言葉	各学部長	2
退官にあたって		8
新任教官紹介及び挨拶		13
日本とアメリカとヨーロッパの氷採り	理学部 助教授 庄子 仁	14
音楽は国境のない言葉	外国人留学生（教育学部）邵 筠	16
平成2年度東日本地区国語問題研究協議会		16
平成2年度高分子学会北陸支部第39回研究発表講演会 及び第12回若手研究会		17
学生部だより		18

卒業生・修了生へ

人文学部長 三 寶 政 美



私が今住んでいる家の近くにちょっとした原っぱがある。家と家とがせめぎあうかのよう密集した住宅地の一角にぽっかりとあいたそこだけの空間。地方都市ならではのありがたさである。

引っ越ししてきた頃、原っぱにはいつも子ども達の声があがっていた。わが子のたてる声もそれに和して聞こえてきた。子らはやがて成長し、原っぱからしだいに遠のいていったが、彼らに続く世代の子らはいなかった。いつしか原っぱは声を失い、草ぼうぼうの空き地と化した。つい数年前まではここで子ども達が朝な夕な草野球、ラジオ体操、花火など季節季節の遊びに興じていたというのに、もはやその光景を目のあたりにすることはできず、今や思い出の世界となってしまったのである。

私達の少年時代と原っぱは切り離せなかった。私は少年時代を北関東のとある山村で送ったが、当時の私にとって原っぱは部落のお宮であった。そこは又登校時の集合場所でもあった。ここ一帯の土地は浅間山の噴煙でできた火山灰地であったから、農業が主で一年通して畑仕事に追われ、文字通り貧乏ひまなしの農家が村の大半を占めていた。そのためにどこの家の子どもも幼くして労働力の一員と目され、下校すると親からさかんに用事をさせられ、朝は朝で「ギョウ」なるものを日課の仕事に科せられた。ギョウとは、男女に違いがあって、女の子は起床すると家族の布団をあげることから始まり、各部屋の掃除をし、板の間、縁側の雑巾がけをした。男の子は庭を竹箒で掃き、牛に飼葉を切って食べさせ、風呂の残り湯、台所の廃水を汲みあげて棄てるといったものだった。その仕事内容からして、ギョウという言葉の由来はお寺の小僧が毎朝課せられる修行の「行」にあったようだ。

私は敗戦の一年前から東京の空襲を逃れて、この父親の生家である伯父の家に行きこんできたのであった。お客でおれたのもつかの間で、やがて私にも村の子ども並みにギョウの命令が下った。とはいうものの東京育ちで新参者の少年には荷が重すぎた。牛の飼料

となる飼葉とは乾燥した稲藁を押し切り器で短く切ったものだが、この切り方がむずかしい。馴れるまで私は右手の人差し指を何度となく器の刃で傷つけ血を流した。いつだったか富山市の文化保護財に指定されている内山邸を子ども達と参観に行ったら、作業小屋に私が昔使ったと同じ押し切り器が陳列されていた。あまりのなつかしさについて子どもに説明しようとしたら、傍らに「手で触れるべからず」と張り紙があった。思わず手で触る輩は私だけではないとみえる。ところで風呂の残り湯を二つの大桶に汲み出すのはたやすいが、それを天秤でかつぐのが難事であった。コツは肩でかつぐのではなく、腰でなう点にあるのだが、非力な少年が身体でそれを悟るまでにはかなりの日時を要した。それにしても当時の農家には浴室の設備などなく、一様に風呂桶一つを冬は土間、夏は外に置くというお粗末さであったから、こんな仕事もありえたのである。

馴れていくとはいえ、そこは子どもである。ギョウが業苦と思える日もあった。そんな時はいっそのこと病気にでもなればギョウから解放されると考え、心底から病気を願ったが、皮肉なことにギョウそのものが子ども達を強健な身体に作りあげていくのだった。

しかし、私達が嫌いなギョウにも堪え得たのは、登校前にお宮で遊ぶ愉しさがあったからである。子ども達は朝早く起きるやこま鼠のように動いてギョウをすますと、食事をとるのももどかしくお宮に駆け込む。そこで年かさのボスが来るまでのしばしの時間を思い思いの遊びにふけたのである。遊びは季節にもよったが、女子はお宮の板の間でおはじきやお手玉をとり、元気な子は縄とびをするのもいた。我々男子はもっぱら手製の布ボールで三角ベースをしたものだった。冬になると、裏山から拾ってきた枯枝で焚き火をしたのも忘れられない。時間ぎりぎりまでねばって、さあ消すぞの段になると、男子はいっせいにズボンの前をあげて小便の放水ごっこをして、ことさらに女子の嬌声をあげさせようとした。

今でも時々あのしばしの時間が何故あんなにも楽しかったのかと思う時がある。子どもの本能的欲求である遊び心を大人達に奪われていた私達は、あそこで辛うじて欲求を充足させようとしていたのであろうが、

もしその前のギョウがなかったとしたら、お宮での愉しみはきっと半減していたにちがいない。

やがてポストに引率されて、私達が小高い丘に立つ学校の校門に一步足を踏み入ると、ワーンというどよめきにも似た喚声が耳を打つ。朝礼前の一刻をそれぞれの遊びを通してつい先程私達が愉しんだと同じ思いを満喫している仲間達の声である。このように我々の学校の日はず子ども達の遊びから開始された。今日のように朝食もとらず寝ぼけ眼で駆けつける子どもはいなかったのである。

高校生になると、私の朝はお宮とは縁が切れたが、ギョウはなおひき続いてあった。さすがにこの頃ともなればギョウは30分もあればすませるほどの腕達者になったが、代わって市の学校まで10キロ余りの道のりを自転車^{まこ}で通う時間が加わった。寝床から思い切りよく飛び出し、大車輪でギョウをすませ、朝食をかきこみ、田舎のジャリ道をふっとぼしても、一時間目の授業の教師と先を争うように教室にすべりこむことが多かった。10数年前、高校の同窓会が開かれたことがあり、私は上京ついでに参席した。会場に入ると、中年にさしかかった観のある〇君が私を目ざとく見つけ、近寄ってくるやいきなり「君はあの頃いつだって一時間目中、頭から湯気をたてていたね」と往時をなつかしむように語った。そういえば、〇君の座席は私の後方にあった。いつものように教室に走りこみ、座席につくや学帽をぬぐ。するとパッと私の頭からいっせいにたちのぼる白い湯気。とっさに私は自分の過去の姿

を想像した。だが市育ちの〇君には湯気のたった真の原因は知るよしもない。さりとて今更説明したところで何になろう。私は口をつぐむことにした。

しかし、〇君の再会以来、私はすっかり忘れていた少年時代のギョウと、それに連鎖する原っぱでの遊びのことを時々思い出すようになった。そしてそのたびにそれらが現在に至るまでの私を支え、今なお私の体内に生きつづけていることに気づくのだった。それが何であるかは一口で言えないが、今でも空想癖が強く、どうしようもない自分をどうにかここまでくい止めてくれているものが少年時代にあったのだとは言える。押し切り器で傷つけた無数の跡は白く今も私の人差し指に残って消えない。それを見るたびに、これこそ爆撃下の猛火の中で死んでいった両親が私にくれた勲章であったと思うのである。

今年もまた、新しい人生の旅立ちを控えた卒業生・修了生を前にして、くだらぬ思い出話にふけてしまった。それが私の悪い癖であることは自分が一番よく知っている。だが、いざさか居直って言うならば、人様に何と言われようと、自分にとって棄ててはならぬ思い出があるはずである。諸君達にもそうした思い出の一つや二つはあるだろう。またこれからの人生にあって新たに作られていくかも知れない。思い出に埋没するのではなく、思い出から立ち上ること、それが人間が生きるということではないだろうか。

卒業生・修了生へのはなむけの言葉

教育学部長 山地啓司



卒業生の皆様おめでとうございます。一般教養と専門教育とを修め、最高学府における4年間の学窓生活を終えて、今、実社会に旅立たんとする諸君の胸中は、希望と不安の交錯した複雑なものであると思います。16年間におよぶこれまでの学校生活は、ご家族の物心両面にわたる援助と庇護のもと、自己中心的

になされてきたかもしれません。しかし今後は一人前の大人として扱われるだけでなく、諸君自身のことに加えて、家族のこと、職場のこと、地域社会のこと、日本のこと、世界のこと等々、実に多くの事象に心向けなくてはなりません。しかも、相手の立場に立つてものごとを考えなければならなくなるでしょう。

今日の原子力発電所にはフル・プルーフと言われ、何重にも安全装置が施されています。しかし、幾年前に、アメリカ・スリーマイル島とソ連・チェルノブイリでは原子力発電所の重大事故が発生し、今なお多く

の人々がその後遺症に苦しんでいます。事故は誰もが予想できるような凡ミス連続が原因でした。もし、計画・設計にあたったエリートの人たちが、実際に発電所に勤務する人の身になって構想・立案していたのなら、これらの惨事は回避することができたであろうと専門家たちは考えています。

また、ベトナム戦争は多くの悲劇を刻みながら終結しました。この戦争ほどアメリカ人が敗北感を味わったことはなかったと言われていますが、ベトナム戦争におけるアメリカ軍の戦略戦術は、米国本土にあってエリート中のエリートがコンピューターを駆使して立案したものでした。一方、ベトナム現地で参戦した将校は述懐して「もし、本土のエリートや政府高官が戦場に来て悲惨な現実を直視し、またベトナム人がなぜこれほどまでに抵抗するのかを理解しようとしたならば、この戦争は数年早く終わっていたであろう。そして、ベトナム人やアメリカ兵の何万もの尊い命が救われ、かけがえのない広大な緑の原野も焦土となることから守られたであろう。」と述べています。

この二つの例は、世にエリートとされる人たちに、ものごとを客観的に見られない、見ようとしなない、すなわち相手の立場に立って考えられないという構造的欠陥があることを如実に示しています。

わが国の柔道界で（オリンピック候補選手や強化選手に比べてそれほど体力的に優れているというわけでもない）山下6段が203連勝したことは、スポーツ科学者の間で驚きをもってむかえられ、今でも語りぐさ

となっています。しかし、山下6段はインタビューの中で、この点に関し「戦うのは数字ではありません。人間です。僕には、相手が何を考え、どんな技をかけようとしているのかを読むことができる強みがあります。」と答えています。

実社会で本当に求められている素養とは、状況に応じていつでも相手の立場になってものごとを考えられる能力です。“電力の鬼”と言われた松永安左衛門は、社会で大成するためには浪人生活と闘病生活が必要である、とまで言いました。浪人をする事で否応なく自分の非力さが自覚させられるため、自然と謙虚な人柄になります。また、闘病生活によって病人や弱者の立場と気持ちを汲み取れるようになります（吉田兼好も「徒然草」の中で、友人とするには不適当な者として“身の強き人”を挙げています。あまりに丈夫な人は思いやりの心に乏しく、友人にはむかないというのです）。もし、浪人をせずに浪人の気持ちを理解でき、闘病生活をせずに病人を知ることができれば、それにこしたことはありません。ただ、なかなか難しいことですが……。

さて、卒業生の皆様、自ら選んだ道をこれから力強く歩んでいってください。たとえそれが茨の道であろうとも、また千変万化の困難が待ちうけていようとも、相手の気持ちを理解しようと努めてさえいれば、やがて道は少しずつ開けていくものですから。

皆様の前途が幸多きものであることを祈念しております。

経済学部卒業生に贈る

経済学部長

よし はら せつ お
吉 原 節 夫



皆様のご卒業を心からお喜び申し上げます。

さて、皆さんに贈る餞の言葉を執筆しているこのとき、ニュースでは、湾岸戦争関連の内外の動きをトップに、ソ連バルト三国の独立要求に関する動き、ペレストロイカへの保守派・改革派の対立等、

全世界の注目を浴びている大事件が次々と報道されて

いる。まさに激動の時代に、皆さんは、大学の課程を終えて新しく社会人としてのスタートをきろうとしている。考えようによっては、怒濤渦巻く荒海へ小舟を乗り出すようだともいえるが、皆さんは、むしろ4月からの新たな職場や仕事への期待と希望で胸ふくらむのを禁じ得ないであろう。その気持ちを大切に、何ら臆することなく、生き活きと、堂々と、各自の道を歩み続けていってほしい。皆さんの最終学年では、新黒田講堂が竣工してモダンでユニークな姿を誇示し、新構内交通規則が施行されて富山大学のキャンパスは面

目を新たにした。また、わが経済学部は、4月から大学院経済学研究科をスタートさせることが認められ、一段と充実して飛躍することが展望されることになった。皆さんも、母校の発展とともに自らの成長を期していただきたい。

このような気持ちから、卒業する皆さんに今後留意してほしいと私が考えていることを少し述べておきたい。

第1に、視野を広くするよう努めることである。

現在、学問・研究がますます細分化の傾向にあることは、皆さんが学んだ色々な講義や文献から分かることである。ところで、これからの皆さんは、特定科目の学習成果を示す答案作成でなく、現実生に生起する実際問題に取り組み、どのように対応し解決すべきかを判断し、実践的選択をしていかなければならない。その場合には、問題を広い視野から捉え、大所・高所から判断することが肝要である。当該問題が全体の中でどのような位置づけにあるのか。その歴史的背景はどうか。他の問題とどのような関連性をもつのか。ある対応策をとれば、他の問題にどのような影響をもたらすのか、等々、多面的・立体的に考察して総合的な判断を下すように心掛け、その能力を養っていかねばならない。

よくテレビで聞くキャスターのコメントや常連評論家等の解説・意見のなかに、視野の狭いもの、1点だけ取り上げ切り込んだものを多く見聞する。皮相で、一面的な判断・意見なので、広い視野をもち、掘り下げたものを見る人々に対して全く説得力がない。テレビ討論等でいくら熱っぽく主張しても、そのように政治・経済・社会が動かないのは、その意見や批判が軽薄であり重厚な論拠や総合的な視点を欠くためであることを見抜くべきであろう。

上述のことをもう一度押し進めると、「知的」であってほしい、ということになる。今の世の中には、不正確な解説・短絡的な主張・浅薄な評論などが余りにも多い。大学で社会科学の学習を経験し学士として巣立つ皆さんは、努めて知的にも物を見、聞き、読み、考える時間を多くもつようにして、識見を深め、卒業後にますます自己の能力を開発して、自己を大きく伸ばすという気概をもち精進を続けてくれることを期待する。

第2は、「展望」をもっていることである。

内外の社会情勢の大きく目まぐるしい変化や動きは、私たちに多くの教訓を与えてくれる。些事に一喜一憂することを避け、周章狼狽することなく、広い国際的な視野に立って知的に事態を洞察し、基本的動向を展望することが大切である。短期・中期・長期の展望をもてというのは、皆さんが、これからの社会生活で簡単に挫折感や敗北感をもたないように願うからである。皆さんを取り巻く情勢や環境は、絶えず色々と変化する。もしも不測の事態が生起したならば、新しい情勢に応じて新しい展望を見据えて進めばよい。その意味で、「常に」展望をもつことが必要であるといえる。

皆さんは、富山大学に入学して4年以上のユニバーシティライフを送り、雪国の風土に接し、その春夏秋冬の気候の下で生活した。その体験を今後生かしてほしい。冬の雪は冷たく足場が悪くなるけれども、吹雪が止んで晴れたとき白雪の立山連峰は最も美しく荘厳な姿を見せる。「冬来たりならば春遠からじ。」厳しい冬を耐え抜いて春を迎え、一際きれいな花を愛でることができるというもの。

どうか健康に十分気をつけて、明朗活発な言動で毎日を送り、それぞれの仕事に向かって健闘されることを祈る。

卒 業

理学部長 小 鯨 幸 寛



卒業、多くの人にとってそれは、待ちに待った時ではないでしょうか。明日からは講義や実験に縛られることはないし、試験は過去の悪夢しか思えない心境でしょう。実は、数十年前に私もそう感じ

たことを告白しましょう。

処で、事典によると卒業の「卒」は「終わること」となっています。とすると、「業」とは何なのでしょう。ものの本では「仕事、勉強、なりわい」などとなっています。「仕事、なりわい」が終わると言うのはおかしいので、「勉強が終わること」というのが素直な解釈と思います。しかしながら、よく言われるように、

卒業によって勉強が終わるとは誰も思っていないでしょう。

英語で卒業に相当する graduation は「目盛を付けること、区切り」の訳があり、むしろそれが本来の意味であると書いてあります。卒業によって勉強が終りにならないのならば、むしろ graduationの方がより適切な表現かもしれません。

さて、卒業によって勉強が終りにならないとしたら、この後は何を勉強するのでしょうか。くだいようですが、「勉強」とは何のことか、もう一度事典に頼ります。「勉強」とは「学問・技術を学ぶこと、精を出して勤めること、商品を安く売ること」となっております。この際の勉強とは、第1番と第2番目の意味だと思えますが、在学中の勉強と卒業後の勉強はどのように違うのでしょうか。この辺になってくると、意見は別れるのではないのでしょうか。上にあげた第1と第2の両方が同じように続くと考える人もいれば、そのどちらかの比重が重くなるという人もおもしろいでしょう。

この話は以前にしましたので、知っている方もおられるとは思いますが、もう1度それを繰り返します。それは一ある企業の方が言いました「大学では基礎知識を十分に与えてください。教育は私達がします。」—これは、教育という言葉の使い方が間違っているだけかも知れませんが、本当に企業で教育をすると考えているとしたら、明らかな間違いです。まして、基礎知識を与えるだけが大学の使命と信じているのであれば、

恐ろしいことです。

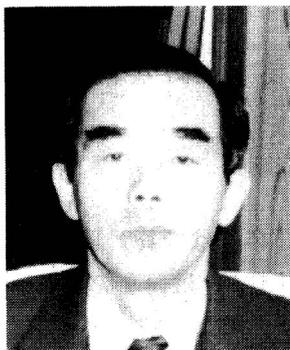
教育は大学が行うべきもので、基礎知識を与えるのは重要ではありますが、教育の一部でしかありません。大学で受けた基礎知識を企業で、その特殊性に合わせて切り売りするのは、何のために大学を出たのか問われることになるでしょう。理学部で体得してほしかったのは、未知の事象に対する探究心、自然科学的論理性と、それを多方面に適用できる柔軟性でした。これらこそ、自然科学を基礎とするあらゆる分野に対応できる人材を養成する理学部の本質であると信じています。

そろそろ收拾しましょう。卒業後も勉強は続きます。しかし、「卒業」はやはり区切りなのです。諸君が理学部で学んだはずの勉強は、事典に説明されている解釈を越えたものだと考えて下さい。これからは、あのような教育を受ける機会は殆ど無いと思います。それは二度と戻らない貴重な日々であったのです。理学部では基礎知識しか学ばなかったと思う人は不幸です。しかしながら、今からでも、何が本質であったかを考え、思い当たることがあれば、その不幸は小さくなるでしょう。本質について多少なりとも学ぶことが出来たとと言える人は、安心してこの区切りを通過して下さい。

何れにしても、卒業生諸君の発展を祈っております。

工学部卒業生の皆さんへ

工学部長 づくり みち さい いち
作 道 榮 一



学部及び大学院の皆さん、長い間の蛍雪の功がいまここになり、めでたく卒業、修了されることになりました。誠におめでとうございます。父兄の方々もさぞ喜びとともに安堵されていることと思えます。これで愈々工学技術者の卵として社会にその一員として

参入し、生産技術の革新、向上のための活躍の場を求めて人類福祉に貢献することになりました。我々エ

ンジニア且つ教育者であるものとしては本当に喜ばしいことです。

ここで、工学技術者の卵という言葉の意味ですが、それは学部卒生においては普通4年間を通じて工学に関する基礎的分野の教育を修了したということ、院生修了者はさらに2年間当該専攻の専門基礎的分野を修得したということの意味です。付言すれば学部生は所謂、工学的なゼネラリストであるということが出来るかと思えます。現代社会では工学技術の領域はまさに多岐亡羊としてきています。今後は益々学際領域における多様多岐な複合技術の必要性が増大してくるで

しょう。そのゼネラリストは様々な分野において工学的な応用展開の能力を持っており、自己に合った領域に根を下して成長することが可能であることを意味します。院生はさらにその上に特定の専門分野において提供された技術的問題を効率的に解決しうる能力を持った工学的スペシャリストです。この能力をもって、将来の技術革新に大きく貢献することが期待されます。勿論、これら技術者の特性は学部生、院生の如何にかかわらず固定されるものではありません。どの様な特性をもった技術者になるかは、各人の目的意識の強さが大きい要素になることは言を俟ちません。いずれにしても先端科学技術立国を目指している我が国の技術革新のために、諸君が産業界から大きく囑望されているということは大変やり甲斐のある人生だと思いませんか。

さて、工学技術者の一員として社会で機能して行くためには次の3点が大きな要素として挙げられると思います。第1は問題に対する解析力が挙げられます。それは正しい認識の下に適切な判断を行い、論理的に処理するということですが卒論、修論研究を通じてよく知っていることと思います。困難な問題に遭遇したとき技術者としての明確な目的意識をもって（それはときとしては見失うことがあります）不撓の努力をそれに傾注して効率よく解決するよう願っています。

第2は協調性が挙げられます。大小にかかわらず共同社会の一員である以上、その社会が機能していくためには協調性が必要です。我々の社会では効率の向上が最重要項目の一つとして挙げられ、そのために個々の力を結集することが求められています。工学技術者の分野ではとくに重要であり、昔のように孤高を信条とする行き方は今の時代では適応能力がないものとみ

なされます。協調性を発揮し人間関係の円滑化を促進されることを希望しています。

第3は表現力の問題です。すなわち自己の仕事を明確な形あるものに纏める能力が必要になります。一般に人間の評価は「結果」で決まるということです。どれだけ優れた発想をもって仕事を行っても、最後の仕上げ（形あるものとして発表すること）を行わないと社会ではその力量を認めません。画竜点睛を欠くことのないように程よいタイミングをもって発表するのが自己の力量を説明する有力な手段になります。この3点はそれぞれ密接な関連をもって繋がっていますから、各点を相互補充をすることによってより効率のよい人生を歩むことができるでしょう。工学技術者の観点から言えば、この3点の基本をなすものは工学基礎であることは言うまでもありません。

誰でも長い人生において、その雌雄を決する節目が一度はめぐってきます。その際には工学技術者たる諸君は少なくともこの3点が帰趨を決める要素になります。引いては、その基盤である工学基礎が人生の節目の鞍部であるということになります。このことを考えると、今後とも必要に応じて基礎学問の反芻と十分なる集積が必要不可欠であると云えるでしょう。

人間の通性として、その環境が大きく変化する際には多少の差はあれ、希望と不安が交錯するものです。今諸君は丁度その状態にあるかと思いますが、ここで工学基礎が十分に修得されておれば上述の主旨から云って希望の方が主たる位置を占めることになるでしょう。大部分の諸君は希望に溢れた技術者の卵として社会へ参入していくことと確信しています。

今後は何卒健康に留意され倦まず弛まずこれからの長い人生を着実に歩まれんことを祈念して止みません。



平成2年度停年退官者

教育学部	永野 弘	工学部	高辻 雄三
経済学部	山崎 清	教養部	有澤 一男
理学部	川井 清保	教養部	須山 幸男
工学部	宮尾 嘉寿		

平成3年3月31日付けで7名の教官が停年退官されます。退官に当たって思い出や感想等を語っていただきました。

富山大学を去るに当たって

教育学部教授 ながの 永野 ひろし 弘



汽車の中で北陸の旅なる小冊子を眺めていたら北陸万葉めぐりという欄に大伴家持の歌がのっていました。

しな離る 越の五箇年
住み住みて 立ち別れ
まく 惜しき宵かも

家持が越中を去るとき残した歌で、彼もその昔この富山の地（高岡）に5年間住んでいたと云います。そしてあたたかい人々、美しい自然、去り難い気持でいっぱいだったのではないのでしょうか。

現在私も富山に来て5年になります。富山に来る時には雪の多い、寒い、どんよりした灰色の空の地を考えて赴任することに決心が付きかねたことでした。しかし、水は綺麗だし、魚は美味だとすすめられてやって来たのでした。ところが更にその風景の美しいこと、こんな美しい山々の見える都会は日本にも少ないのではないのでしょうか。

学生達と一緒に立山の頂上にまで登ったり、室堂辺りの雪の切り通しを眺めに出かけたり、黒部川、黒部湖を見に行ったり、有峰で薬師岳を望みながら紅葉を

賞でたり、早月川上流に劔岳の写真をとりに、そして馬場島でバーベキューを楽しんだり、また先生方のお蔭で西穂の近くの中尾温泉で雪の降る中、露天風呂に入ったり、高山、五箇山、御母衣ダムの辺りを散策したり本当に素晴らしい5年間でした。これまで日本の中を歩くことはありましたが、それは学会のついでにさっさと行ってくると云うふうでした。ところが富山に来てからはゆっくり自分の足で歩いて、本当に我が国の自然の美しさを再認識したわけです。丁度この5年間は冬は暖かく雪が少なかったことも助かりました。

話は変わって一昨年、東京の中国人学生からAさんが富山大学を受験に行くからよろしくとの電話がありました。試験の前日、富山駅から電話があり、駅で本人に会い、宿は何処かを予約しているかと尋ねたところ何も未だやっていないと云うので駅の案内所からあちこち連絡して貰ったのですが、どこも満杯でした。私のアパートとも思ったのですが、女子学生でもあるしということで総曲輪のうなぎ屋で晩飯を2人して食べながら何処か宿屋はないかな、例えば地鉄立山駅前の民宿なら空いているだろうか聴いてみてくれなかと頼んだわけでした。店の人はそんな遠い所に泊めては可哀そうだとあちこち電話してくれておりましたが、或るお宅でそれではお困りでしょうかから一晩泊めてあ

げましよう云われ、南富山駅で先方によろしくお願いしたのです。翌試験当日は弁当まで持たせて大学にその女子学生を送って来てくれました。学生は幸い合格しました。これはひとえに見知らぬ外国の女子学生を泊めて下さったそのお宅の方々のお蔭と感謝しています。米国には New Hampshire Hospitality と云う言葉がありますが、これこそ Toyama Hospitality とも云えるものと思います。暖かい人々、去り難い気持、これは私も家持と同じです。しかし現実にかえれば富山では公務員宿舎の住人でありますから、公務員をやめれば自分の家へ戻らねばなりません。

大学は学問・研究を、そして学生に勉強の指導を行う所です。教官の皆様にはよろしく学生を御指導下さい。大学に居る間、学期がはじまってしばらく経つと講義に出てこない学生がありました。彼等は顔も見せ

ないで一体何をしているのだろうとよく思いました。そして私の講義がよくわからないのか、どんな風に講義をしたらよいのかなど随分考えました。しかし何の解答も得ないまま、私は大学を去ります。唯々学生に対して勉強のできる時期に大いに勉強しなくてはという自覚をもってもらいたいと願っています。学生は自分の人生が有限であるなど考えたことはないと思います。しかし無限ではないのです。無為に過ごさず然るべき分野で expert になって一生その道に励んで貰いたいものだと思っています。

光陰矢の如しと云いますが本当に5年間は早く過ぎ去ろうとしています。先生方、事務の方々、学生諸君大変お世話になりました。皆様にもどうか健康に充分御注意なさって下さい。

さよなら……。

ご あ い さ つ

理学部教授 川井清保



“ありがとうございました。”——— ‘自分の研究室’をつくりたくて富山に移ってきたのが昭和38年の秋。日を経ずして、まともにそれをつくる能力があるなどは思い上がりも甚だしいことを私は悟った。振り返れば、以後のこの27年余りは、多くの方々

のご支援とご寛容に支えられての歳月そのものであった。この機会にあらためてお礼を申し上げさせて頂きたい。‘皆さん、ほんとうに有り難うございました。’

“富大生は活躍する力をもっています。”——— 昨年の後半、肝臓移植をうけた幼子が、関係者必死の努力の甲斐もなく、相ついで亡くなる悲しいニュースがあった。天命と言うにはあまりにいたましく、もし自分の子であればと思いを馳せて冥福を祈った。一方、全身に大火傷をしたけれども幸に治り、関係者のみならず私達までが安堵し、喜びをわかちあえて、人の心に国境のないことを改めて感じさせた朗報もあった。後者の場合、その坊やに運と生きる力があったからで

あろう。同じ頃、卒業生の一人から、博士論文ができました、と別刷が送られてきた。理学部構造化学研究室にとっては11人目の、それも学部卒だけのドクターである。ドクターを特別視するわけでないが、これも ‘富大生の能力を証明する事例の一つである。’と私は研究室の諸君に話した。勿論、学術研究とは縁のない分野で素晴らしい活躍をしており私の誇りにしている諸君も多い。みんな、少なくとも私からは先生らしい指導は何も受けていない人達である。先生の指導が足りなくても富山大学の学生は社会で立派に活躍していく力をもっている。27年間を学生諸君と共に暮らしてきた実感である。

“私は幸せでした。”——— 自分の思い上がりで先生になり、学生諸君に胸を張ってこれと言えることは何もできなかったし、多くの諸君に迷惑をかけてきた。にも拘らず、互いに人生を彩りあえる多くの卒業生諸君に恵まれて、私はいま ‘富山で先生の道を選んで幸せであった。’と感謝している。同時に、今春卒業する諸君をはじめ皆さんの活躍で富山大学がさらに発展していくことを願っている。

思 い で

工学部教授 高 辻 雄 三



私が学校を卒業したのは敗戦直後の昭和20年9月であり、就職する会社は皆無でした。日本の国土は荒廃し、国民全体が呆然たる状況の中で、幸いにも2ヶ月の浪人で高岡工専に勤めることができました。それから46年間富山大学工学部とともに歩んできたわけで、

私の人生そのものであると思います。今、停年を迎えるに当たり、過ごしてきた年月を思いおこしてみると全く感慨無量のものがあります。

当時の学校は昭和19年高岡経専から工専に転換した直後であり、機械科に1台の機械もなく、製図室には粗製乱造の製図版が準備されていましたが、学生全員が同時に使えるような状態ではありませんでした。その上復員により学生数は倍増になり、全く手の打ちようがありませんでした。然しながら、当時の学生には覇気があり、ユニークな学生が多かったように思います。

当時は、工専の存続問題、更に学制改革に基づく工学部への昇格問題など、まさに工学部創成期の難題が目白押しの状況で昭和25年頃までは勉強どころではありませんでした。然しながら、占領軍により機械類の賠償指定が解除され、一通りの工作機械も揃い、実験ができるようになったのは、昭和27年頃であったと思います。

私も工専では機械科、大学昇格後は金属工学科に所属していましたが、昭和30年機械工学科が復活するとともに機械へ、そして昭和38年生産機械工学科の増設に伴い、その創設に務めました。これも池田首相の所

得倍増政策による技術者育成の要望にこたえるためであり、学科新設にはかなりの予算がつくようになり、新しい工作機械、測定機類を購入することができ、実験研究の巾が大いに拡がりました。そして工学部各学科に大学院修士課程が設置されたのもこの時期でありました。

その後、昭和40年代に入り、学園紛争の嵐が吹きあられ、工学部もその波にのみ込まれましたが、工学部だけが高岡にあった関係もあり、3ヶ月でストも解除され、徐々に学園が平静化したことは幸いでありました。この間、我が国の工業界は全世界が驚異の眼で見るような高度成長を達成し、石油ショックも乗り越えて技術革新にも一応の成功をおさめ、今やメイド・イン・ジャパンの商標はかつての安かろう悪かろうのイメージを一新し、世界で最も信頼される品質の象徴に変わってきました。

工学部としましても、20年来の願望でありました五福キャンパスへの移転統合も無事終了し、世界の技術革新に対応するため、工学部の改組が進められていますが、これもようやく軌道に乗り、いよいよ、大学院博士課程の設置に向けて勢力的に努力が重ねられていることは、誠に喜ばしいことであります。工学部にとって、ここ数年間は創成期に匹敵するような多事多難な時期であり、学部長を中心に工学部の英知を集めて対応され、平成3年度概算要求で博士課程設置に対する燭光が見えたとの報告を聞き、私としても心残りなく停年を迎えることができます。

終りに当たり、お世話になった全ての方々から心からお礼を申し上げ、富山大学の益々のご発展を祈念致します。

停年退職の随感

工学部教授 宮尾嘉寿



停年退官は人間の一生に譬えれば、天寿を全うして棺に蓋をすることであろう。

江戸後期の狂歌の代表的作者の蜀山人は辞世の句に

「いままでは他人（ひと）
のことだと思ふに
俺が死ぬとは
こいつたまらぬ」

といい、豊臣秀吉はその死にのみ

「露と起き露と臥しぬる人の世や

難波のことは夢のまた夢」

と、この世を大夢の如しと観じ去った。まこと、5年程前までは停年退官など自分に関係ないと思っていたが、2年前から実感が生じ、1年前になると覚悟が出来て、どうせなら1日も早くその日が来ればよいと思うようになった。教員生活通算44年、振りかえると長いようで短く、まさに「黄梁一炊の夢」の感がする。小学校入学以来これまでは「1週間」が生活のサイクル単位であったが、これからは「1ヶ月」がそれになる。全く新しい生活が始まると考えることができる。人間の一生を一日に譬えると、仕事を終えて帰宅し、このあと就眠までの仕事に縛られぬ自由時間、これが退官後の人生の時間である。この時間を有意義に充実して過ごすか否かがその日（人生）が幸せであるかどうかが決まると思う。このゆえに私は停年退官を「往生の素懐」をとげると悟りたい。

昭和32年に前任校金沢大学工学部より創設したばかりの工学部機械工学科に赴任し、まだ蒸気機関車の走っていた水見線越中中川駅に降り、古ぼけた木造の校舎に入った。校庭では桜や公孫樹などの樹木が群立し落ち着いた雰囲気であったが、私の居るべき研究室に案内されると、そこには机と椅子だけがあり、所属の実験室には金づちとドライバー、万力があるだけで実験設備はゼロであった。これを見て、これからの学生の教育、実験、自分の研究を如何に進めるべきかと頭を悩ませた。学生実験は金属工学科の試験機を借りて行

い、乏しい校費から少しずつ測定器等を購入した。従って自分の研究は必然的に紙と鉛筆による理論計算、すなわち数理弾性学を手掛けざるを得なかった。

解析して得られた数式の数値計算を行うためには、当時は手廻し計算機が唯一の武器であった。連日朝から晩まで腕が痛くなるほど廻し続けた。しかるにその後電子計算機が出現し、いままで3ヶ月を要した計算を僅か1日で行ってしまい、いままで汗を流したことが無駄であったような気がし、同時に科学の進歩に驚いたものである。愛用したタイガー計算機1台を記念に残し、あとは処分した。また理論解析が不可能に近い問題もコンピューターを利用した有限要素法により可能となるなど、機械工学の材料力学の分野に大きな変化をもたらした。

昭和30年代の工学部は冬の暖房は木炭火鉢で、朝登校すると作業員室へ火種を貰いにゆくのが仕事の始まりで、厳寒には室内でもコートを着ていた。その後、実験室と教室が石炭ストーブになり、次いで石油ストーブが現れ、なんと便利なものよと驚いたが、五福に移転してスチーム暖房になった。いまでは朝研究室のドアを開けると、ムーンと暖かい空気が顔にあたり、これこそ文化生活の極致と幸福感に浸るのは以上の暖房の歴史があるからであろう。

また当時は教職員の数もいまの三分の一程で、毎年末の忘年会は仰嶽寮の二階大広間で、木炭コンロによるスキ焼きであった。富山—高岡間の国道8号線（現在の県道）には地鉄のトレーラーバスというものが走っており、私が始めて自動車を求めた昭和39年には工学部内には車は4台しかなく、富山—高岡間には交差点の信号は大門、小杉、呉羽の3ヶ所だけであり、最高制限時速も普通車60km/h、トラック50km/h、軽自動車40km/hであった。まさに隔世の感がある。

退官後は「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬、雪ありて楽しかりけり」の気持ちを持ち、浄土真宗の寺院の住職として、内には「欣求浄土」、外には「衆生済度」を次ぎなる人生の停年まで続けたいと思います。

永い間お世話になり、有難うございました。合掌

五福3190番地に40年

教養部教授 有澤 一 男



昭和24年から平成3年まで41年間富山市五福3190番地に、勤務した計算になるといえば、長い様で短くも感ずる。

(1) 着任した頃は、市電は新富山までであとは徒歩で15分位、その間は餅屋と〇〇綿屋ぐらいで、今の様な家並はなく、左は練兵場（現在の五福運動公園）左は田圃で、正門に向かうと右手に連

隊本部の建物、1中隊の建物、左手に将校集会所と馬小屋、雪中演習場の建物を転用した、富山大学、富山師範学校が頑張っていた。

その頃の校舎といっても、旧兵舎を転用したもので、暗い裸電球がぶらさがり、窓はガタガタで冬は雪が吹きこんでくる。暖房も火鉢1個で、マントやオーバーを着ての授業であった。

その後木造ながら新しい校舎が逐次出来て、火鉢から石油ストーブとなり、裸電球から蛍光灯になって喜んだものだった。

昭和28年に文理学部の経済学科が現経済学部へ昇格して、32年に五福の地で独立した校舎が出来、コンクリートの建物ははじめてであり、皆の羨望的であった。

次いで33年に事務局、学生部の庁舎（現学生部、保

健管理センター）が出来た。

(2) 文理学部（一般教養を含む）は蓮町（旧制富山高校）にあり一般教養授業に週2回位ずつ通っていたのが、37年に五福へ移転して来て蓮町へは行かなくてすみ、ずい分と助かった事を思い出す。

翌38年に体育館（現第1体育館）が出来、39年には薬学部移転、工学部を除く学部が揃い何となく大学らしくなって来た。

40年には学生会館が竣工、42年には教育学部、ますます大学らしくなった。と同時に文理改組により教養部が設置された。

(3) 44年には武道館の設置、48年には大学食堂、51年弓道場、53年には更に第2体育館がより大学の風格を高めた。

(4) 55年に事務局が完成し、その跡地に学生部、保健管理センターが竣工した。

60年工学部第2期工事完了、高岡より工学部移転、ここに悲願の五福集中がかなった。

61年第3体育館が竣工、平成に改まった年黒田講堂が当大学シンボリックな存在で五福の地に華をそえた。

(5) 人文学部2期工事、図書館増築工事、経済学部及び教養部の改築工事等々まだまだ進行中、あと10年もしたら、ここまで書きしるして来た40年の歴史の何倍もいや何10倍もさまがわりをするだろう。

最後に心より富山大学の発展を祈るものである。

退官に際して

教養部教授 須山 幸 男



富山大学に赴任して3年6ヶ月、無事停年退職の日を迎えられましたことに深い感慨を覚えております。

教養部数学の教官の方々はじめ多くの方々から賜りました折々の御厚意に心から御礼申し上げます。

1948年に九大数学科を出てそのまま助手になって15年間、そして雪国富山の県立短大、富大と教員生活をつづけて28年間。その間、学制改革、情報の多様化とその量の増大、学生気質の急

速な変化などを懐かしく思い出します。

殊に、富大に来て驚かされたことは、教養課程での理工系学生に対する“必須”または“選択必須”の科目から数学が除外されていることでした。かねがね、理工系学生にとって数学は論理展開とその文章表現の訓練に適していると思ってきましたので、これも43年間の教員生活で記憶に残る変化の一つです。

教養部の将来計画について多くの討議がなされていますが、今後のよりよき展開を期待します。

終りに、本学の発展と皆様方の御活躍、御健康をお祈り申し上げます。

新任教官

。馬 列 外国人教師（人文学部）2. 11. 17
1967. 8. 大連日語専科学校卒業
担当：中国語会話、作文、中国語

。佐々木 和 勇 助教授（工学部）2. 12. 1
昭46. 3 富山大学大学院工学研究科修士
課程修了
医学博士
担当：電気システム工学

新任の御挨拶



私は中国遼寧省瀋陽市に生まれ育ちました。出身校は大連外国語学院です。大学時代から日本語学習を通して日本人の先生に接し、日本民族の礼儀正しさと良い衛生習慣及び進んだ技術にとっても感心しておりました。

遼寧大学日本研究所に17年余り勤務しましたが、中国では改革開放政策を取ってから外国に留学したり、外国で仕事したりする人の数がだんだん増えてきています。日本語の縁でしょう。大変日本に親近感を持っているためか、今回で3度目の来日になります。3年前東北大学に1年3ヶ月留学、昨年は関西日中経済技術交流協会の仕事で、4ヶ月大阪に滞在しました。でも、日本の大学で教えるのは、初めての経験です。

諺にもあるとおり“袖振り合うも他生の縁”。振り返ってみれば、両校の友好関係と相互理解をさらに深めるため、両校の学長が相互訪問されたあと、人文学部の三宝先生が第一号として遼寧大学に3ヶ月ご滞在

外国人教師 馬 列（中国人）

され、馮学長主催の送別会に通訳として参加させて頂きまして、初めて三宝先生にお目に掛かった訳です。ですから富山大学とは6年も前に、付き合いがありました。それから、3年前の留学中、主人が日本政府外務省のお招きにあずかり、日本訪問中にも富山にまいりました。『富山は立山に恵まれて、米やお酒はおいしいし、薬もとっても効き目がある』と富山の方が誇らしくご紹介下さいました。それで日本に対する私の好感は、むしろ富山に対する好感へと向けられました。

この度、富山大学での仕事のチャンスを与えていただき、良い学習のチャンスを与えて下さったと思います。2年間はもし旅行の目的でしたら、長いでしょうが、学習としては、相当短いと思います。ですから、この2年間、時間を生かして使いたいと思います。授業を重要な一環として、富山大学との友好交流を深めていくため、力を注ぎます。すこしでもお役に立てれば何よりです。

十何年間、教鞭を取ったと言っても、日本の学生むきの授業は初めての経験ですので、色々御指導を賜りたくお願い申し上げます。



平成2年12月1日付けで、工学部電子情報工学科電気システム(3)講座に着任致しました。昭和46年に本学工学研究科修士課程を修了してから数えますと、19年ぶりに古巣に戻って来たことになりま

す。もともと、建物に限って言えば高岡時代の工学部に比べ随分立派になりましたから古巣という言い方は適切でないかもしれません。着任して新しいキャンパスの建物を見ていますと、かつて在学中、“工学部の早期五福移転を”などと叫んでいた頃が懐かしく思い起こされます。

さて、私はこの19年間、富山医科薬科大学やニューヨーク大学などで、生体システム特に中枢神経系における情報処理様式に関する研究をシミュレーションや電気生理学的手法を用いて行ってきました。一般に、中枢神経系に関する研究ではこれまでその入口と出口、すなわち感覚情報処理と運動制御に関する研究が多かっ

たのですが、最近では思考、認知、学習、記憶など脳の高次機能を研究対象とし、その情報処理システムの構成原理や動作原理を解明しようとしています。工学的にも興味深く、最近の私自身の研究もこれに関連したものです。ところで、このような研究には神経科学だけでなく計算機科学、情報科学、認知科学など多方面からのアプローチが重要であることはいまでもありません。幸い、本学にはこれら方面の専門家もいらっしゃいますのでよろしくご指導、ご援助をお願い申し上げます。

中枢神経系の発達という観点からみますと大学の4年間の時期はその完成期にあたります。また、神経系の発達には適切な時期に適切な刺激を与えることが不可欠です。たとえば、ある時期に適切な視覚刺激が与えられなければ、その後視覚機能は働きません。学生諸君に是非考えていただきたいのは、諸君一人ひとりが毎日首の上につけて持ち運んでいる球形の物体の中の中枢神経系はその完成のために大学時代の4年間、一体どんな刺激を必要としているのかということです。

海外研修記

日本とアメリカとヨーロッパの氷採り



平成元年の夏から平成2年の夏にかけて、極地を3度訪れたので、そのことをお話ししようと思います。目的はいずれも氷採りで、極地の大陸氷河(氷床)上でコア・ボーリングを行い、直径約10cmの水の円柱状試料を連続して採取し、その物理・化学解析から、地球上の古環境変動を調べようというものです。

平成元年の5月、日本初のグリーンランド内陸調査隊8名(代表は極地研究所の渡辺教授)が成田を出発しました。グリーンランドはデンマーク領ですが、人

口5万のうち約8割はエスキモーで、姿・顔立ちは日本人そのものです。西海岸の町ソンドレストレムフィヨルド(以下SFJと略記)には米国の空軍基地があり、飛行場が氷食谷の地形を旨く利用して谷底につくられています。デンマークのコペンハーゲンからスカンジナビア航空でSFJに到着し、別送してあった装備を受けとります。SFJから更に東へ約200km、チャーターした双発機で飛んでくると、そこはもう全て雪と氷の世界。休む間もなく小屋造りです。2日かがり雪洞をこさえ、発電機を始動すると準備完了。氷採りにかかる前に、やはり日本人ですから氷鎮祭をしようということになり、日本から持ち込んだ御神酒と即席の神主とで無事成功を祈ります。この地をJapanの

頭文字の頭文字をとって Site J と名づけ、約 1 ヶ月間、コア掘削と処理・解析を行いました。その間、外部の人との接触といえば、コペンハーゲン大学のハンクニールスと交わす SF J=Site J 間の定期無線通信だけ。コア掘削もほぼ順調に進み、電動ドリルの日本記録205m 深を 1 m 更新して意気揚々と撤収にかかります。SF Jに戻るとニールスからシェラトン（コペンハーゲン大学借上げの小屋の名前）に泊まるよう招待され、全員大喜び。防寒服を脱ぎ、熱いシャワーを浴び髭を剃ると皆シティー・ボーイに早変わり。帰りのコペンハーゲンでは人魚姫が見たい。

平成元年10月、アメリカの西南極バード基地でのコア掘削に参加するため、ひとり成田を出発。ホノルルで本隊4名と合流する予定が、サンフランシスコ大地震と丁度重なって大混乱。とにかく無事に合流でき、グリーンランドでは無線で話ただけで会えなかったハンクとも、今度は同じ隊員として再会し、ニュージーランドへと飛ぶ。躑躅のきれいなクライストチャーチは、米国南極調査隊の空路の出発点で、ほとんど全ての人々がここから南極マクマード基地に入る。アラスカから来た他の隊員3名を加えて我がチームは、ラングウェイ隊長以下8名となり、マクマードから更に飛行機を乗り継いでバード基地に到着。ここは現在、航空燃料の給油地として使われていますが、1968年には南極初の深層コアが2,164m 深まで連続して採取されました。この時80m 深までは熱ドリルが使われ、コア表面は融けて変質しており、解析項目によっては測定不能でした。そこでこの度の浅層コア掘削（電動ドリル使用）となったわけです。天候条件 I という超一級のブリザードに見舞われながらも、80m 深を優に越える165m 深までコアを採取し、帰国。

平成2年7月、バードコア解析のためニューヨーク州立大学へと渡米。その後、グリーンランド最高度のドーム頂上（ドーム・グリップ）で行われている深層コア掘削・解析に参加するため、7月下旬パツファローを立ちSF Jへと向かう。グリップ（GRIP）は、Greenland Icecore Project の頭文字で、デンマーク・スイス・フランス・イギリス・ドイツなど、ほぼ全ヨーロッパ協同による大プロジェクトです。基盤付近の水の年代は、20万年前を超えると考えられています。フィールド活動の全責任者がハンク、ロジスティクスはニールスが担当しています。さて、SFLのシェラトンに着いてみると、英国南極局の双発機が手配済みだから明日早朝発てという。時差ぼけと旅の疲れと高度変化（海拔3,200m）がごちゃ混ぜになりながらキャンプに着くと、今晚アメリカ隊と共同パーティーを開くという。名目は何と聞くと、スイスいやフランスの記念日だとか、ピーターとクリスチーナの誕生日だとか、要するに理由は各人に任せるとのこと。早速国旗が飾られだすのを見ると、日の丸の旗もある。嬉しかった。8月上旬には770m 深まで掘り進み、同月15日にキャンプを閉鎖して総引き揚げ。全ては、来年（平成3年）5月まで冬ごもりである。あと2シーズンで氷厚3,000m をぶち抜くという野心的プロジェクトである。実は、ここから西へ約30kmの地点で、アメリカも独自の深層コアプロジェクトGISP2を進めており、両者の協力関係はすこぶる良い。その後再びパツファローのラングウェイ研究室に戻ってから帰国。フィールドにいても、ラングウェイ先生の口ぐせ「Work hard!」が頭の中で鳴り響いていた。（写真はドーム・グリップの掘削小屋と居住棟内部の様子）



留学感想

音楽は国境のない言葉

外国人留学生（教育学部） しょう 邵 きん 筠（中国）



私は海の向こう、中国渤海湾の天津で生まれました。天津は中国でも3番目に大きい都市であり、近海からとれる大きな海老や近郊の小站米という米、あるいは天津甘栗などの特産品で知られています。私は、富山で子ども達が天津甘栗を食べる姿を見て、懐かしい故郷を想うかべたりしています。

また天津は声楽家の故郷でもあります。中国の著名な声楽家や歌手の多くが天津出身の人達なのです。そうした環境の中で育った私は、小学校2年の時からテレビやラジオに出演し、将来の声楽家をめざし、1973年から天津音楽学院で学びました。

11年前（1979年）の5月、私は“中日友好の船”で日本の11の都市を訪問したことがあります。その中で一番印象深かったのが現在の留学の地、富山でした。白く雪におおわれた立山連峰、おいしい水・空気、そして富山の人達の心のぬくもりは、中国へ帰っても忘れることができませんでした。もう一度富山で勉強す

ることができれば最高のことと考えていました。10年を経て、私の夢のような願いが日本の知人によってかなえられたのです。飛び上がるほどの喜びでした。

来日当時は言葉が不自由ではありましたが、音楽には世界中に共通の五線譜があります。私と指導教官の間ではほとんどコミュニケーションに障害を感じることはありませんでした。音楽は世界の最も通じやすい言葉であり、いかなる言語もこれに及ぶものはありません。そういう意味で、音楽に国境はなく、全人類の心をつなぐものであると思います。

富山に来て1年4ヵ月を過ごし、たくさんのオペラと日本の芸術歌曲を学びました。昨年の5月6日には富山県民会館で古賀政男先生記念コンサートに出演することができました。また9月9日には富山県教育文化会館で開催された“われら人間コンサート”にも出演させていただきました。

憧れる声楽家への道はなお遙かですが、富山で様々のことを学ぶことで、音楽という崇高な仕事に一生たずさわることのよろこびの思いをあらためて確かめつつあります。

学会報告

平成2年度東日本地区国語問題研究協議会

本大会は、平成2年10月2・3日の両日、富山大学において開催された。文化庁・富山大学・富山県教育委員会・富山市教育委員会の四者共催である。会場は全体会議が黒田講堂、各部会が教育学部第三棟であった。

本協議会は、全国を東地区と西地区に二分した上で、毎年、各県もちまわりで行われる。富山県は二度目である。

国語問題とは、国語（現代日本語）に関する諸般の問題ということであるが、近年は①現代仮名遣いの問題、②常用漢字表の問題、③外来語の表記、④社会生

活における国語をめぐる諸問題、の4本の柱をたてている。従って、一応4部会構成ということになるが、国語問題の多岐性・混融性を考えて、各部会の討議内容は上記の分類にはよっていない。様々の現場的問題を発表し、それについて逐次討議し、助言が行われるという形態をとっている。各部会とも、2日間を通してあらかじめ予定された4ないし5名の発表、参加者は50名程度であった（各県割当による制限）。社会教育的立場の人から小・中学校の教師に至るまで、様々の分野から発表提案がなされた。

第1日目は開会式後、文化庁調査官による「外来語

表記」(平成2年発表国語審議会案)を中心とした説明と、「美しく豊かな言葉をめざして」(文化庁製作)のビデオの映写が行われ、午後から部会協議に入った。第2日目は午前中部会を行い、午後各部会に提出された問題をまとめる全体会議を持ち、2時より講演が行われた。講演は鳴戸教育大学副学長の野地潤家氏による「言語生活の設計と課題」で、氏が実践的教育活動を通して出会った先学の教育への提言をいかに消化実

践しようとしてこられたか、ということの紹介で、国語教育に生涯携わってこられた氏の人柄そのままのような内容であった。

全体を通しての素直な感想を記せば、多少、形式化に流れたとの感を持たざるを得なかった。それは討議内容がしばられていないということに帰するかと思う。せめて上記の4課題にしばって、各部会に割り当てるべきだったように思われる。(文責 教育学部 重見一行)

高分子学会北陸支部。第39回研究発表講演会

及び第12回若手研究会

平成2年10月8・9日の両日にわたって、標記の学会が教育学部とKKR銀嶺を会場として開催された。高分子学会北陸支部は新潟県から福井県までの4県で組織されており、学会員は約300名と小世帯ではあるが、高分子関係の企業等の協力もあり、活発な活動を行っている。支部活動の中心は標記研究発表講演会と若手研究会であり、毎年1回、4県が持回りで担当している。平成2年度は富山地区が担当して開催された。

研究発表講演会は10月9日(火)8時45分から教育学部において、3会場に分かれて60件の発表が行われた。

参加者数は約400名、北陸地区をはじめ他地区および海外からの出席者も加わって活発に討論が行われた。

本学からは次の3件の報告があった。

- (1)共役ジアセチレン化合物の合成と重合(5)
(富大工)°矢元正俊・島崎長一郎、(富大教育)竹内茂彌ら。
- (2)新規環状イミノカーボネート類のカチオン開環重合反応
(富大工)°宮本真敏、(京大工)三枝武夫ら。
- (3)原綿繊維に含まれる糖性物質(Honey dew)について
(富大工)°長谷川淳・島崎長一郎ら、(富大教育)竹内茂彌。

研究発表終了後は、午後3時から次の2件の特別講演が行われた。出席者は約150名であった。

- (1)ポリビニルアルコールに関する二、三の研究
長岡技術科学大学教授 今井清和先生
- (2)核酸モデルの合成化学的展開とその応用
大阪大学工学部教授 竹本喜一先生

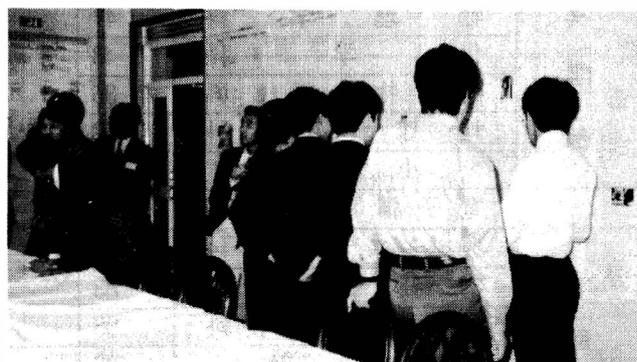
今井教授は平成元年度高分子学会功績賞、竹本教授は昭和63年度日本化学会賞を受賞しておられ、両先生とも受賞対象となったご研究を中心に、それぞれ約1時間講演された。講演終了後は、約100名の会員が一堂に集い、高分子学会北陸支部の益々の発展を祈って乾杯した。

一方、若手研究会は10月8日(月)にKKR銀嶺を会場として行われた。本年度のメインテーマ『新しい機能性高分子膜』に関する講演が2件あり、そのあと大学院生が中心となったポスターセッション方式の発表会があった。約100名の若手が集まり熱気溢れる討論がなされた。

懇親会のあとも、夜の更けるのも忘れ語り明かしたと聞く。

なお、本学会北陸支部は、他地区においても講演会等の行事を年数回開催しており、また4~5年に一度は全国的学会としての高分子討論会を担当している。今後とも学内の皆様のご協力をお願いします。

(文責 教育学部 竹内茂彌)



若手研究会ポスターセッション

学生部だより

平成4年度入学試験から分離・分割方式を導入

本学の平成4年度入学試験の実施方式は、去る10月19日開催の第7回評議会において決定され、下記のとおり分離・分割方式で実施することとしました。

昭和62年度からは、国立大学の受験機会の複数化が図られ、本学は連続方式のB日程で実施してきましたが、受験生の選択機会の拡大と多様な選抜方法の導入など大学入試に対する社会的要請等から、入試方法の

工夫・改善について各学部で検討され、平成4年度から分離・分割方式により前期日程・後期日程に分けて実施することになったものです。

なお、大学入試センター試験及び個別学力検査の実施教科・科目及び配点並びに推薦入学、帰国子女・社会人特別選抜の実施については、7月末までに発表する「入学者選抜に関する要項」を参照願います。

平成4年度富山大学入学試験実施方式・募集人員

(平成2.10.19 現在)

学 部	学 科 (課 程)		入 学 定 員	実 施 方 式	募 集 人 員			
					連 続 方 式		分 離 ・ 分 割 方 式	
					A 日 程	B 日 程	前 期 日 程	後 期 日 程
人 文 学 部	人 文 学 科		95	分 離 ・ 分 割	—	—	70	25
	語 学 文 学 科		95				70	25
	小 計		190				140	50
教 育 学 部	中 学 校 教 員 養 成 課 程		50	連 続 (A 日 程)	50	—	—	—
	小 学 校 教 員 養 成 課 程		100	分 離 ・ 分 割	—	—	70	30
	養 護 学 校 教 員 養 成 課 程		20	分 離 ・ 分 割	—	—	14	6
	幼 稚 園 教 員 養 成 課 程		30	分 離 ・ 分 割	—	—	21	9
	情 報 教 育 課 程		40	分 離 ・ 分 割	—	—	30	10
	小 計		240		50	—	135	55
経 済 学 部	昼 間 主 コ ー ス	経 済 学 科	144	分 離 ・ 分 割	—	—	105	39
		経 営 学 科	124				91	33
		経 営 法 学 科	102				74	28
		小 計	370				270	100
	夜 間 主 コ ー ス	経 済 学 科	20	連 続 (B 日 程)	—	—	20	—
		経 営 学 科	20				20	—
		経 営 法 学 科	20				20	—
		小 計	60				60	—
理 学 部	数 学 学 科		43	分 離 ・ 分 割	—	—	33	10
	物 理 学 科		47				35	12
	化 学 学 科		43				30	13
	生 物 学 科		35				20	15
	地 球 科 学 科		32				27	5
	小 計		200				145	55
工 学 部	電 子 情 報 工 学 科		132	分 離 ・ 分 割	—	—	92	40
	機 械 シ ス テ ム 工 学 科		101				71	30
	物 質 工 学 科		83				58	25
	化 学 生 物 工 学 科		86				60	26
	小 計		402				281	121
合 計		1,462		50	60	971	381	

(注)平成3年度の学生募集において、募集人員のうち経済学部「昼間主コース」経済学科の「144名」を「159名」に、理学部数学科の「43名」を「53名」に変更を予定している。

外国人留学生との懇談会開催される

本学教職員と留学生との懇談会が、去る12月13日(木) 富山第一ホテルにおいて開催されました。

この懇談会は例年行われているもので、本年度も大井学長はじめ瀧澤学生部長、勝山事務局長、各学部長、留学生の指導教官ら63名と留学生62名の出席があり、大井学長の開会挨拶に続き、吉原経済学部長の乾杯で懇談に入りました。

懇談会では、留学生からお国自慢の歌がつつぎと披露され、また、留学生と教職員の談笑が随所に見られるなど、終始なごやかな雰囲気で行われました。

最後に、留学生を代表して人文科学研究科 趙青さんが御礼を述べた後、瀧澤学生部長の閉会の挨拶があり懇談会を終了しました。



開会の挨拶をする大井学長

在来生合宿研修実施される

平成2年度在来生合宿研修は、1月6日から10日まで、志賀高原ブナ平スキー場を中心に、スキー研修、分科会、全体会等の日程が組まれ、12名の指導者のもと110名の学生が参加して行われました。

スキー研修では、各レベルごとに班編成され、それぞれがスキー技術の上達を目指しました。分科会では、「スポーツへの挑戦」をメインテーマに、各班別に、熱心な討論が行われ、また、全体会では、映写会等が

行われました。

最後の夜には、演芸会が行われ、各班研修中練りに練った演芸で、演芸力ばかりでなくチームワークのいいところを披露するなど充実した研修が行われました。

このように今年も多大なる成果をあげ、無事終了できましたことは、ひとえに、御指導いただいた諸先生方、お世話いただいた清広荘の皆様並びに体育会事務局諸君のおかげと、深く感謝いたします。

平成2年度後期授業料免除について

平成2年度後期授業料免除者の選考が、11月8日に開催された授業料等減免選考委員会で行われ、右表のとおり決定しました。

なお、授業料免除及び奨学金を希望する者で、不明な点があれば、厚生課奨学係又は各学部等の学務係(経済学部、教養部は学生係)へ相談してください。

区分	出願者	免除許可者	不許可者
学部	559 ^人	387(160) ^人	12 ^人
大学院	29	20(9)	0
計	588	407(169)	12

()は、半額免除許可者で内数

キャンパスの草本誌（6）

ヒメオドリコソウ（*Lamium purpureum* L.） シソ科

－ キャンパスの比較的新しい住人 －

ヒメオドリコソウは、漢字で姫踊子草と書く。全体が同族のオドリコソウより小さく、また花が淡紅色で、それで姫の一字がついたのであろう。

高さ20cm内外の2年草。茎は四角柱で、基部はやや地に伏し、そこから分枝して立ち上がる。葉は対生し、葉身は円く基部は心形、ふちに鋸歯がある。葉面は葉脈にそってくぼみ、細かくちぢむ。葉柄は茎の下部では数cmあるが、上部では短い。最上部は無柄になり、葉は紅紫色を帯びた三角状の苞葉に変わる。節間も短くなり、苞葉は重なりあって密生する。花期は4～5月。花はその苞葉のわきに数個ずつ輪状につく。花冠はシソ科に共通した唇形で、長さ約1cm、色は淡紅色。がくは中ほどまで5裂する。

一方のオドリコソウは、高さ40cm内外の多年草。茎は同じく四角柱。葉は対生し、上部は密生しない。花期は4～6月。上部の葉のわきに白また淡紅色の花を数個輪生する。上唇が平たい笠形の唇形花。これを笠をかぶった踊子に見立てたためこの名がある。

オドリコソウは、わが国のほか、朝鮮・中国に分布する。富山県内は少ない。ヒメオドリコソウは、ヨーロッパ原産の帰化植物で、明治26年、東京で最初に記録されている。富山県の記録は新しく、昭和36年、庄

川町のものがある。今は各地で見られる。

本学キャンパスでは、正門付近のほか、ところどころに群生し、春には淡紅色の花をつける。一方、オドリコソウは理学部の温室の裏に群生している。透明感のある白い花は、なかなか見ごたえがある。

教育学部教授 ^{なが い しん りゅう}
長 井 真 隆



ヒメオドリコソウ、円内はオドリコソウの花

▽▲▽▲▽ 学園ニュース編集委員 ▽▲▽▲▽

学生部長	瀧澤	弘
人文学部	河村	貞枝
〃	大工原	ちなみ
教育学部	呉羽	長
〃	原田	嘉昭
経済学部	山崎	清
〃	松井	隆幸

理学部	松本	賢一
〃	広岡	公夫
工学部	島崎	長一郎
〃	杉本	益規
教養部	高安	和子
〃	山本	孝一